

「再定義」される景色—看護実践の可視化と、歩んできた道のり

千葉大学大学院看護学専攻

岡本 聡美

3月も終わりに差し掛かる穏やかな午後、私は博士課程の修了式という大きな節目を迎えていた。会場には、渥美国際交流財団を通じて絆を深めた2人の友人が駆けつけてくれた。「家族として入場したよ」と笑顔で打ち明ける彼らの姿に、この上ない安堵と感謝の念が込み上げた。式典を終え、私たちは語らないながら駅へとゆっくり歩き始めた。しばらくすると、研究生活のなかで幾度となく往復した馴染みの風景に差し掛かった。不意に浮かんだのは、研究終盤の孤独な夜道である。不全感や先の見えない焦燥感でいっぱいになりながら歩いた寒空の下とは対照的に、今は隣に友人が寄り添い、他愛のない会話に声を弾ませている。それまでの葛藤が報われるような、不思議な充足感に満ちた光景であった。

この道の上で私が向き合い続けてきたのは、看護学の研究である。財団において、看護学を専門とする奨学生は私が初めてだと聞いている。看護学研究とは、看護実践の根拠を創出し、ケアの質を向上させるための科学的探究のことである。ケアの対象は、病気や障害を抱える人々や家族に留まらず、地域住民や組織集団など、極めて広範である。すなわち、あらゆる場において人々が健やかに、あるいは平穏に生きていくための営みすべてが、看護学の探究すべき領域となる。近年ではテクノロジーと融合し、AIやロボットを活用した未来志向の学際研究も盛んになりつつあり、ケアの概念は拡張し続けている。

私には、病院や介護施設といった保健医療福祉の現場で、長年看護の実践に携わってきた経験がある。人の生老病死に立ち会うなかで、私が最も強い関心を寄せたのは、認知機能が低下した高齢の方たちであった。その根底には、彼らが本来もつ「発揮できる力」が軽んじられているのではないか、という強い問題意識があった。認知機能が低下した高齢の方は、一括りに「認知症高齢者」と呼称される傾向がある。一般にこの言葉から想起されるのは、意思疎通の困難さや介護負担の大きさとといった負のイメージであることが多い。私自身の経験においても、専門分野を伝えると、「大変ですね」という反応に接することがある。そこには、認知症のある高齢の方を「負担をもたらす存在」と捉える、社会に深く根ざした先入観が潜んでいるように思えてならない。

彼らが示す混乱や焦燥は、置かれた「環境」に起因するケースが少なくない。我々が、無意識のうちにそうした過酷な環境を作ってしまったという側面もあるのだ。例えば病院。無機質な白い壁に囲まれた病室、昼間もカーテンが閉ざされたままの薄暗い空間、あるいは絶えず鳴り響く医療機器のモニター音。脳の器質的变化により認知機能が低下し、状況把握が困難になった人にとって、こうした過剰な刺激が耐え難い不安や困惑をもたらす。そのため、低下した認知機能を環境の側から調整し、本人の発揮できる力を補完することは、日常生活を継続するうえで不可欠な要素である。したがって、療養環境を整えて心身への負担を最小限に留めることは、ケアを担う看護師の根幹をなす極めて重要な実践である。しかしながら、日本の看護学領域において、それらを学習する機会は極めて限定的であり、具体的な方法を導く指南書は存在しなかった。そこで、日本の医療施設において看護師が活用できる新たな

実践的ガイド、すなわち「環境づくり看護実践ガイド」を開発することを博士論文のテーマとした。

研究の後半では、開発したガイドを実際の病棟へ導入し、その有用性と可能性を探究した。当初、このツールは新たな知識や技術の習得を目的としていたが、現場ではより内省的な変化が生じていた。ガイドを手にした看護師たちは、自らのケアを省察するプロセスにおいて、経験則や暗黙知に基づき無意識に積み重ねてきた良質な実践を、「言葉」として可視化していったのである。すなわち、個々の「日常業務」が、ガイドという触媒を介することで「療養環境の調整」という明確な専門的概念へと再定義されたのだ。既にそこにある「実践」を客観的に捉え直すこと。このシンプルな再定義のプロセスは、療養環境をより良く整えていこうという、現場の力強い推進力となった。

駅までの道のりを歩き終えた私たちは、友人の1人の故郷にちなんだベトナム料理店へと足を運んだ。渥美国際交流財団を通じて出会った友人たちとの笑い声に彩られた語らいは、修了の喜びと相まって、いっそう伸びやかに共鳴した。これほどまでに穏やかな時間を享受できるとは、冬空の下、不安に駆られながら通学路を辿っていた数か月前の私には、想像も及ばぬことだった。あの寂莫とした道は、この時感じた温かな場所へと地続きに繋がっていたのだ。そう思えたことが、嬉しくもあり、ありがたくもあった。

分かち合える友と研究生活を振り返る経験を通して、私の孤独な日々は「社会実装への確かな足跡」として再定義することができた。現場の看護師たちが、自らの実践を専門的な「環境づくり」として客観的にとらえられたことで、それまでのケアを肯定的にとらえ直したように。この静かな手ごたえを糧に、次なる探究へと歩みを進めていきたい。